

歌はどこから

黒人霊歌資料にアメリカの意識を追う

ウェルズ恵子

要 約

Two major approaches have dominated the study of the oral texts of Black Spirituals in the United States. The first is the folkloristic approach, which emphasizes the collection of original texts and the historical or sociological interpretation of them in the context of slavery. In the early twentieth century, the origins of the songs became the central point of contention for those who took this approach; the debate centered around whether Black Spirituals were an imitation of European songs or a variation on African songs. These arguments were obviously biased by competing concepts of race. The second is the musical approach. Musicians and scholars of the nineteenth and early twentieth century presented Black Spiritual songs to general audiences and readers after having arranged them to meet prevalent musical standards of the time. They shared the common understanding that the songs represented a form of high art and were, naturally, evidence of African American's artistic talent. Thus, the songs were often referred to in political speeches and literature that advocated civil rights for African Americans. This annotated bibliography, introduced by my explication of specific texts, demonstrates that the study of Black Spirituals has been considerably inflected by the racial consciousness of society of the time.

はじめに

アメリカ合衆国における黒人霊歌の普及は、きわめて社会的である。奴隷として連れて来られたアフリカ人が、英語とキリスト教を自分のものとするまでに何世代かかったか、また彼らの音楽文化がヨーロッパのそれと融合して新たな歌が生まれ始めたのがいつごろかは、明確にはわからない。しかしアフリカ人とその子孫たちはずっと何かを歌っていて、彼らの声と音楽的才能は早くからアメリカ人を魅了していた。18世紀の奴隷広告をみると、バイオリンが弾けるのを特技として奴隷が売りに出されている（Eileen Southern, *The Music of Black Americans: A History* [1971. New York: Norton, 1997] 25-27.）。にもかかわらず黒人霊歌は、南北戦争期に北部の白人が記述するまで、アメリカ社会にその存在を広く知られることはなかった。以後、黒人霊歌は真剣な研究の対象となり、研究軌跡は黒人と白人の意識の違いを表すようになる。本稿は資料を辿って、この点を明らかにする。

構成は、黒人霊歌研究動向の分析と解説、黒人霊歌アンソロジー注釈付き一覧、黒人霊歌関連参考資料表、となっている。

1. 二つのアプローチ

黒人霊歌の資料は、時間に沿って変化しながら継続する二つの流れを持っている。

民俗学的研究

一つは民俗学的興味による研究である。これは、奴隷解放という大きな社会変革の結果、急速に失われていく奴隷の音楽文化を記録保存する情熱に基づいていた。この流れを担っていたのは、必然的に白人の研究者たちだ。発音や音楽の特徴についてなるべく原型のまま黒人霊歌を記録しようとする姿勢は、南北戦争直後に始まり1940年代まで続くが、黒人の生活の変化と放送文化の普及によって収集すべき「原型」の歌がなくなり、研究は下火になっていく。

民俗学的アプローチをする研究者らが繰り返し問うのは、歌の起源である。それをアフリカととらえるかアメリカの南部白人文化ととらえるかによって、研究に差異が生まれる。アフリカととらえた研究はアフリカ系アメリカ人に好意的に受け取られ、エスニック意識の高まりとともに、黒人音楽の解説で第一章を担う理論となっていった。一方、白人文化を黒人が吸収して自分なりに表現し直したのだという理論は、その正誤にかかわらず、おそらくは無意識的に表現されてしまう白人優位の思想のために、永続的な支持を得られずに終わっている。

結局は、どちらの影響も受けているので、黒人霊歌にアフリカの影響が支配的か南部白人文化の影響がより強いのかという議論自体にはあまり意味がない。むしろ、どういう要素がどの文化から持ち込まれ、なぜそこに根付き、どのように発展したかが問題になるはずである。しかし、少なくとも1940年代の終わりまで、文化の影響関係における後先^{あとさき}や優劣が主に議論されていた。

音楽的研究

もうひとつの流れは、音楽に対する関心から生まれる研究である。民俗学者が黒人霊歌独自の音楽をできる限り原型のまま西洋音階の楽譜に写そうとした一方で、音楽家たちは、霊歌を積極的に編曲して「より良く」することに力を注いだ。この流れを作ったのは、黒人大学の合唱団、フィスク・ジュビリー・シンガーズである。彼らは経験的に黒人霊歌が白人の聴衆を感動させると知り、レパートリーを広げていった。当然、コンサートで好まれるように歌は編曲された。コンサートは莫大な収益を上げたから、他の黒人大学も同様のことを始めた。そして、黒人霊歌は広く知られるようになる。

フィスク合唱団を発足させたのはジョージ・ホワイトという白人であるが、彼の後に合唱団の運営をしたのは黒人の歌手で、以後この流れの研究は黒人が主な担い手となっている。これによって、音楽のアプローチの方向性は定まった。黒人は奴隷制度を憎むので、奴隷時代の歌に対する純粋な郷愁を持たない。原型の黒人霊歌は、彼らの芸術性の証として、または奴隷制の悲惨と過ちを明らかにする史料としての価値は持つが、独自の音楽的文学的不完全性は改良

歌はどこから（ウェルズ）

されていかねばならない、と彼らは考える。次に、この歌は商品価値が高かった。当然、より多くの聴衆を得られる歌がよりよい歌であると理解されるようになっていく。

しかし問題は、聴衆が誰かということにある。1920年代後半、ハーレム・ルネサンスの思潮の中で、黒人の価値観によって霊歌を編曲しようという動きが始まった。音楽を中心とした流れは、研究よりもむしろパフォーマンスの分野で発展し、現代音楽へとつながっていく。同時に、ジュピリー・シンガーズに発した黒人霊歌コンサートの伝統も別の潮流となって生き続けた。

この時期までに黒人霊歌は人種のアイデンティティを表現する文化として受け入れられており、文学にも言及が増える。黒人霊歌は文字を使えなかった奴隷たちの口承詩として認められた。ハーレム・ルネサンスの時代には、コンサート用の黒人霊歌が本物ではないというゾラ・ニール・ハーストンの発言に見られるように、より黒人本来の歌に戻して発展させようと努力がなされたのである。

付け加えると、黒人霊歌は19世紀初めに南部の農村で起こった信仰復興で野外集会を中心に発生し口承されてきたといわれ、ゴスペル・ソングとは異なる。黒人のゴスペル・ソングは1920年代に盛んになった都市型の宗教歌である。黒人霊歌の作者は不明だが、ゴスペル・ソングの作詞者作曲者は、普通はわかっている。ニューヨークのポピュラー・ソングから旋律を借りて使うことも多く、流行音楽の要素を備えている点でも黒人霊歌とは異なる。

2．時代の推移

次に、研究動向を時代ごとに区切って、相互関連を見てみたい。

初期 存在を知らせる

最初は、黒人霊歌の存在を北部の知識人たちに知らせる資料が作られた。歌や声のすばらしさを伝え、独特の歌詞や語彙を説明し、音楽的な解説も可能な範囲内でつけられている。トーマス・ウェントワース・ヒギンソンは、1867年の「黒人霊歌」“Black Spirituals”において、北部人の持っている「奴隷とはいかなるものか」という素朴な疑問に答えるべく、黒人の行動についても報告している。怠惰、愚鈍、狡猾といった黒人に対する偏見を排して、彼らが同じ人間であることを述べる際には、奴隷解放論の正当性を奉じる意識が強く働いている。一方、黒人の宗教集会やシャウトの様子については、驚きの記述が見られる。同67年に『アメリカ合衆国の奴隷歌』*Slave Songs of the United States*でウィリアム・フランシス・アレンの報告したテキストは断片的なものが多く、それはむしろ歌の現場から直接聞き取った事業の証拠となっている。また、西洋音階で現せない音楽と、独特の発音や語彙を記すために、収集者が格闘している様子が明らかに読み取れる。黒人に対する複雑な意識や霊歌への賞賛ととまどいが交錯するのが、この時期の資料の特色である。

普及期 ジュピリー・シンガーズの影響

1873年に、G. D. パイクによるジュピリー・シンガーズの評伝と歌集合体本が出た。それから

1907年のジョン・W・ワークの歌集までは、大学合唱団楽譜集の全盛期である。霊歌の流行が黒人大学に及ぼした影響は大きく、歌集が相次いで出版された。歌は聴衆(白人)の好みに合わせて編曲されている。この時期に発行されたもののうち唯一、1899年の『大農園の昔の讃美歌』*Old Plantation Hymns*が土着の歌の収集記録である。この本には、音楽、生活、言語について言及があり、民俗学的研究のひとつといえる。

研究充実期 歌はどこから来たのか

1914年に、音楽評論家であったヘンリー・エドワード・クレビエルが『アフロ・アメリカンの民謡』*Afro-American Folksongs*を出版したころから、黒人霊歌の民俗学的研究と、霊歌音楽をステージ用に発展させようという二つの流れは交わり合いつつ充実していく。

クレビエルはアメリカ黒人歌とアフリカ音楽とのつながりを指摘した。それ以前の1886年に、ジョージ・ワシントン・ケイブルが「プレイス・コンゴのダンス」“The Dance in Place Congo”で、アフリカとの関連性に言及しているが、特に注目もされなかったようだ。しかし1910年代にはクレビエル以外にも、黒人霊歌がアフリカ民謡をひとつの起源としていることがよく語られていた。1915年のワークの著作は、第一章が「アフリカの歌」、二章が「歌の移住と変転」に当てられている。

1925年、スケアポロは幼い頃から聞いていた黒人歌を収集編纂し、世間で流行しているコンサート用の黒人霊歌が土着のそれといかに違うかを示して見せた。このころまでには、コンサート用の霊歌はクラシック音楽の伝統によって完成していたのだ。

1920年代後半から30年代にかけて活躍したハワード・W・オダム、ジェイムズ・ウェルドン・ジョンソン、ニューマン・ホワイトらは、これまでの黒人霊歌研究の流れを把握した上で、テキストを社会民俗学的な資料として扱った。すなわち、文化の影響関係と変化のあり方を社会的コンテキストで説明したのである。結果、白人の民間宗教歌が宗教復興の野外集会で黒人に影響を与えて黒人霊歌は発生したという、白人音楽起源の理論が述べられることになる。この背景には、黒人大学合唱団の成功と、ジャズの流行があった。黒人音楽の影響力ばかりを指摘する風潮に対し、白人研究者の反発があったのではないかと思う。もちろん、黒人霊歌への白人民間宗教歌の影響は研究されるべきことであり、発生期に白人宗教歌から黒人への方向性があったのは確かだろう。

こうした研究の一方で、ジョンソン兄弟が代表する黒人芸術家たちは、霊歌をアメリカ独自の芸術として称揚する。霊歌テキストの文学的分類(トーマス・W・タリー, 1922)、ジョンソン兄弟による歌集(1925, 1926)、ウィリアム・アームズ・フィッシャーによる歌集(1926)など、研究成果は一般に届くくらい充実してくる。ハーレム・ルネサンスの思潮を受け、黒人の心を表現するものとして霊歌は扱われていくのである。このころまでに霊歌はすでにさまざまな変化を経験しており、歌詞、曲ともにバリエーションが多かった。ジョンソン兄弟がそれらを整理して、ある程度スタンダードなテキストを作ったことから、この時期に黒人霊歌の社会的位置が定まったといえる。

20-30年代に特徴的なもうひとつのことは、研究が黒人霊歌に限定せず、俗歌や民話を含めた広範なフォークロアに及んだことだ。拙稿では追跡していないが、ブルースの研究も始まっている。

終息期 二つの流れのままに

1940年以降は、それぞれのアプローチが先鋭化していき、研究が社会動向を反映する時期を過ぎたとわかる。ジョン・W・ワークの撰集（1940）は黒人音楽の創造性を強調するが、すでに黒人音楽の現代文化に対する影響の大きさは明白で、論点が社会や文化の動きを反映していない。リメディア・パリッシュの研究書は、ジョージアのシー諸島という分離された地域で収集した土着文化の報告で、もはやそれ以外の場所では奴隷時代からの口承歌は収集が不可能であることを、暗に示唆している。40年代を過ぎると、黒人霊歌の新たな収集は報告されなくなった。黒人霊歌は文化人類学者であるハロルド・クーランダーがしたような、文化移動と変容の研究素材として注目されるか、黒人教会の聖歌集に載るかの方向に収束する。

* * *

黒人霊歌の研究は白人の関心で始まったが、間もなく黒人の関心もひきつけるようになった。しかし、奴隷時代の文化的産物である霊歌に対する白人と黒人の意識の違いは、研究の流れを二つに分ち、そのまま現代に至っている。ルーツとしてのアフリカ音楽への興味は例外として、奴隷時代の文化研究も含める民俗学的アプローチに黒人研究者が深い興味を示さないことと、黒人霊歌が黒人教会の聖歌集にたくさん載って、白人教会の聖歌集にはごくわずかしが採用されないことは、アメリカ社会の分裂した人種意識を反映しているといえるだろう。黒人霊歌は、奴隷が産み奴隷制への罪悪感を負ったアメリカ社会が育てた歌といえるのではなかろうか。

3. 黒人霊歌集と黒人霊歌を含むアンソロジー 注釈付き文献表

黒人霊歌の普及と評価の歴史を現している、相当数のテキストを含むものを、発行年順にリストにした。発行年を囲ってあるものは、最も基本的な初期資料とされている。

[1867] Higginson, Thomas Wentworth. "Negro Spirituals." *The Atlantic Monthly*, XIX (June) 685-94. 合衆国最初の黒人部隊（解放されたばかりの奴隷で構成されていた）を率いて、サウスカロライナで南北戦争を戦っていたときに、ヒギンソンが観察した黒人の様子と彼らの歌を記録したものの。音楽の言及に乏しく楽譜も付いていないが、黒人霊歌の存在を好意的に書いて社会に知らしめた記事として、影響力が大きかった。ヒギンソンは文学者であり、重要な黒人霊歌資料を残した人々の中で唯一、民俗学的立場と音楽者の立場のどちらでもない視点で書いている。ヒギンソンの記録は、これまで多くの本に再録されている。最近のものでは Howard N. Meyer, ed. *The Magnificent Activist: the Writings of Thomas Wentworth Higginson*. New York: DaCapo, 2000. がある。（ヒギンソンと彼の記録の内容詳細はウェルズ「アメリカ黒人霊歌の初期収集者たちとテキスト」『立命館法学・言葉とその広がり（3）』[2005]を参照。）

[1867] Allen, William Francis, Charles Pickard Ware and Lucy McKim Garrison, *Slave Songs of the United States*. Rpt. Baltimore: Genealogical, 1992. 歌詞と楽譜を載せ、収集地もある程度示しているという点で、信頼できる最初のテキスト。北部人がはじめて黒人の歌にふれたときの、驚きと当惑をよく記録している。断片的な記録も多いが、歌のパリエーションにも配慮を示している。(詳細はウェルズ「アメリカ黒人霊歌の初期収集者たちとテキスト」を参照。)

[1873] Pike, G. D. *The Jubilee Singers, and Their Campaign for Twenty Thousand Dollars*. Boston: Lee and Shepard. フィスク・ジュビリー・シンガーズの最初のアメリカ公演旅行について。成功に至るまでの話と、学生歌手の生い立ちなど。61曲の楽譜および歌詞を載せている。ジュビリー・シンガーズについてのもっとも重要な資料となった。(詳細はウェルズ「アメリカ黒人霊歌：フィスク・ジュビリー・シンガーズの成立と歌」『立命館言語文化研究』17巻1号を参照。)

[1874] Fenner, Thomas P., Frederic G. Rathbun and Bessie Cleaveland, arr. *Cabin and Plantation Songs as Sung by the Hampton Students*. New York: Putnam's Sons. The third edition, 1901. ヴァージニア州のハンプトン・インスティテュート(有色人学校)の合唱用歌集。学生からの収集歌を基に編曲編纂されている。1891, 1901年に改定され、1927年に、Dett, R. Nathaniel, ed. *Religious Folk-songs of the Negro, as Sung at Hampton Institute* (Hampton, VA: Hampton Institute Press) として増補版が出されている。

フェナーは前書きで、黒人霊歌集を編纂するには二種類の方法があると明言している。以下の引用が示すそれらの方法のうち、前者は民俗学的方法であり、後者は音楽家たちの取った方法であった。

There are evidently, I think, two legitimate methods of treating this music: either to render it in its absolute, rude simplicity or to develop it without destroying its original characteristics, the only proper field for such development being in harmony. ("Preface to Music")

私が思うに、この音楽 [黒人霊歌] を扱うには、どちらも正当な二つの方法が明らかに存在するのだ。ひとつは、粗野で素朴な性質をあるがままに伝えること。もうひとつは、もとの特質を壊さずに適切で調和ある改良を加えることである。

同じ前書きでフェナーはまた、歌詞が南部全体で大方共通することと、それらの歌詞に地域性のある異なった音楽がつけられていること、すなわち音楽のパリエーションが豊富なことを指摘している。

1882. Taylor, Marshall W. *A Collection of Revival Hymns and Plantation Melodies*. Rept. Cincinnati: Marshall W. Taylor and W.C. Echols, Publishers, 1883.

1886. Cable, George Washington. "The Dance in Place Congo." *The Century Magazine* (XXXI, February) 517-32. (前項解説文参照)

1892. Marsh, J. B. T. *The Story of the Jubilee Singers, with supplement; Containing an account of their six years' tour around the world, and many new songs, by F. J. Loudin.* 1881. Cleveland: Cleveland Printing & Publishing. Pike の *The Jubilee Singers, and Their Campaign for Twenty Thousand Dollars* (Boston, 1873) と *The Singing Campaign for Ten Thousand Pounds* (New York, 1875) を基にした増補改定版。

1899. Barton, William E. *Old Plantation Hymns.* Boston: Lamson, Wolfe and Company. バートンが 1880 年から 1887 年までケンタッキーで収集した歌を収録している。最初別々に出版された “Old Plantation Hymns” と “Hymns of the Slave and the Freedmen” を含む。歌詞と楽譜を載せ、収集で気づいたことを解説しながら紹介している。信仰復興伝道集会についても言及がある。音楽の分析や収集の状況、テキスト、考察などが交錯してやや読みにくいため、黒人霊歌研究の基本テキストとしては使われることが大変少ないが、さまざまな観察と言及があるため、資料価値がある。

[1901]Hallowell, Emily, col. and ed. *Calhoun Plantation Songs.* Boston: C. W. Thompson. アラバマ州の「ブラック・ベルト」と呼ばれる地方（黒人の人口が白人の 7 倍）に立てられたカルフン有色人学校（1892 年創立）で、生徒から集めた歌のアンソロジー。69 曲を収める。1907 年の第 2 版でハロウエルは次のように述べている。

... it is impossible to more than suggest their [of “songs sung by the colored people”] beauty and charm; they depend so largely upon the quality of voice, the unerring sense of rhythm and the quaint religious spirit peculiar to the colored people who have spent their lives on Alabama cotton plantations, untouched by civilization. (“Preface”)

これらの歌の美しさと魅力を、[この本によって]かすかにでもわかってもらおうというのでさえ不可能である。というのも、美しさや魅力の大きな理由は、声の質やひじょうに的確なリズム感や、有色人（colored people）に特有な独特の宗教心にあるからだ。そうした特質が生じた背景には、彼らがこれまでアラバマの綿花農園で文明に触れることなく生きてきたという事実がある。（“colored people” は、黒人を指している。）

1907. Work, John W. and Frederick J. Work. *Folk Song of American Negro.* Nashville: (No Publisher). ジョン・W・ワークはフィスク大学でラテン語と歴史を教えるかたわら、黒人霊歌を収集、編曲した。それらは、フィスク・ジュビリー・シンガーズの新たなレパートリーとなった。序文でワークは、黒人霊歌音楽は、「シンコペーションがきき、律動的で規則的に循環する音楽」と述べている。

1914. Krehbiel, Henry Edward. *Afro-American Folksongs: A Study in Racial and National Music.* Rpt., Baltimore: Clearfield, 1993. (前項解説文参照)

1915. Work, John Wesley. *Folk Songs of the American Negro*. New York: Negro UP. 一章, 二章でアフリカン・デアスポラとして歌を語り, 三章からアメリカ民謡として捕らえた黒人の歌を語っている。歌詞によって11種類に分類している。「喜びの歌」(Joy Songs), 「悲しみの歌」(Sorrow Songs), 「喜びの音調がある悲しみの歌」(Sorrow Songs with Note of Joy), 「信仰の歌」(Songs of Faith), 「希望の歌」(Songs of Hope), 「愛の歌」(Songs of Love), 「決心の歌」(Songs of Determination), 「憧れの歌」(Songs of Adoration), 「忍耐の歌」(Songs of Patience), 「勇気の歌」(Songs of Courage), 「謙譲の歌」(Songs of Humility)である。
- 1918-19. Burlin, Natalie Curtis-, recorded by. *Negro Folk-Songs: The Hampton Series Books I-IV* (Books I-II: Spirituals; Books III-IV: Work- and Play-Songs). New York, Schirmer. 再版 Mineola, New York: Dover, 2001. ハンプトン学院で採譜した曲の集成。カーティス・バーリンはアメリカ先住民音楽の収集でもっとも知られ, ルーズベルト大統領に働きかけて, 先住民の音楽活動を禁じた法律を撤廃させた。代表著書は *The Indians' Book* (1917)である。
1922. Tally, Thomas W. *Negro Folk Rhymes, Wise and Otherwise*. New York: Macmillan. フィスク大学教授のタリーによる収集歌(第一部)と研究(第二部)。第一部は, 「ダンス用詩と歌」(Dance Rhyme Section, Dance Rhyme Song Section), 「遊び詩」(Play Rhyme Section), 「娯楽詩」(Pastime Rhyme Section), 「恋の詩と歌」(Love Rhyme Section, Love Song Rhyme Section), 「求愛の詩と歌」(Courtship Rhyme Section, Courtship Song Rhyme Section), 「結婚の詩」(Marriage Rhyme Section), 「結婚生活の詩」(Married Life Rhyme Section), 「童謡」(Nursery Rhyme Section), 「教訓詩」(Wise Saying Section), 「外国詩」(Foreign Section)に分かれている。第一部は楽譜3曲を除いて歌詞のみ。ミンストレル・ショーと関連の深い“Jump Jim Crow,” やスティーヴン・フォスターの歌と同じモチーフの“Uncle Ned”などを含み, アングロ・サクソン・フォークソングの影響を明らかに受けた歌(“I Would Not Marry a Black Girl”など)も散見される。歌の提供者や採取地についての情報はない。
1925. Ballanta-(Taylor), Nicholas George Julius. *Saint Helena Island Spirituals, Recorded and Transcribed at Penn Normal Industrial and Agricultural School*. New York: Press of G. Schirmer. 114曲収録。うち103曲をバランタ自身が収集している。サウスカロライナ州のペン学校も, ハンプトン, カルフーンと同じく解放奴隷のために建てられた有色人職業訓練学校である。バランタは西アフリカ人で, ニューヨークのInstitute of Musical Artを卒業している。序文では, アフリカ音楽と黒人霊歌の音楽的関連性を分析した。
1925. Fisher, William Arms, ed. *Ten Negro Spirituals*. Boston: Oliver Ditson. 26年の *Seventy Negro Spirituals, for high voice* で完成する, クラシック音楽への編曲の試み。フィッシャーは滞米中のドボルザークに師事した。
1925. Johnson, James Weldon, ed. Musical arrangements by J. Rosamond Johnson. Additional

numbers by Lawrence Brown. *The Book of American Negro Spiritual*. New York: Viking P. 1926年出版の *The Second Book of American Negro Spiritual* と合本し、*The Books of American Negro Spirituals* として69年に再版されている。演奏用に編曲した歌を全曲楽譜とともに載せている。複数の初期の収集家は、黒人の歌にハーモニーがないことをひとつの重要な特徴としているが、ジョンソン兄弟のアンソロジーは、ハーモニーをつけて「進歩」を試みている。パフォーマンス系黒人霊歌の基本テキストといえる。

The collection here presented is not definitive, but we have striven to make it representative of this whole field of music, to give examples of every variety of Spiritual. ... In the arrangements, Mr. Rosamond Johnson and Mr. Brown have been true not only to the best traditions of the melodies but also to form. No changes have been made in the form of songs. The only development has been in harmonizations, and these harmonizations have been kept true in character. ("Preface")

この歌集が決定版というわけではないが、我々はこの本が黒人霊歌全体を示すよう努力し、ヴァリエーションをそれぞれ例示した。編曲はロザモンド・ジョンソン氏とブラウン氏が担当し、メロディーのよき伝統ばかりでなく様式についても誠実に対応した。歌の形式には何の修正も施されていない。ひとつだけ進歩させた点は、協和音を付け加えたこと（ハーモナイゼーション）で、これらの協和音は歌の特性に合わせてある。

1925. Odum, Howard W. and Guy B. Johnson. *The Negro and His Songs: A Study of Typical Negro Songs in the South*. Westport, Conn.: Negro Universities P. 南部社会民俗学の草分けであったハワード・オダムとその弟子ガイ・ジョンソンによる、黒人歌の研究書。独自に収集した宗教歌96曲、社交歌90曲、仕事歌21曲を含める。歌詞に南部黒人の特質や社会生活を読み取るうとし、楽譜の掲載はない。黒人霊歌に集中しがちだった黒人歌への研究者の関心を、フィールドで収集した社交歌や仕事歌に向かわせた。

1925. Scarborough, Dorothy. *On the Trail of Negro Folk-Songs*. Cambridge: Harvard UP. 著者の祖父は2人ともルイジアナとテキサスの大農園の持ち主で多くの奴隷を所有していたという。幼いときから慣れ親しんだ黒人歌を10年にわたって収集した成果。生活の観察も記述に含み、民謡収集者としての明確な自覚によって編集されている。

Folk-songs are shy, elusive things. If you wish to capture them, you have to steal up behind them unbeknownst, and sprinkle salt on their tails. Even so, as often as not they fly off saucily from under your nose. ... Sometimes shyness increases, and again it grows less, under guileful persuasion. Some people will confess to acquaintance with folksongs, perhaps the very ones you may at the moment be most ardently pursuing, yet refuse to sing. They "never could sing," or they have quite forgotten how. ... In such cases I often explain the difference between pleasure singing and singing for science.

フォークソングは、ひっそり暮らすのが好きな恥ずかしがり屋さんである。捕まえたいときには、気づかれないように後ろからそっと近寄り、尻尾に塩をまいてやらないといけない。それでも、ひょい

と鼻先から逃げてしまうことなどしょっちゅうである。・・・恥ずかしがりには時にひどくなり、時には言葉巧みな説得が功を奏していくらかましになる。ある人々が歌を知っていると言ったとしよう。それは、いま収集者が必死になって探している歌がもしれない。なのに、その人たちは歌わないと言うのだ。「歌なんか歌えたためしがない」か、歌い方を忘れてしまっているのだ。・・・そんなとき、しばしば私は彼らに説明する。楽しみのために歌うのと学問のために歌うのは違うのよ、と。

1926. Fisher, ed. *Seventy Negro Spirituals, for high voice*. Boston: Oliver Ditson. すでに出版された曲と個人的なコレクションから歌を集め、編曲を施してある。それぞれの歌の歴史（収集者、出版者、背景）についても記載がある。音楽の解説も含み、*Slave Songs* (1867), *Jubilee Songs* (1872 and 1884), *Cabin and Plantation Songs* (1874), *Colhoun Plantation Songs* (1901), *Saint Helena Island Spirituals* (1925) に収録された歌の、音楽的な比較分析表と編曲者たちの伝記もある。アメリカ音楽学院の理事として滞米していたドボルザークが、いかに黒人霊歌に興味を示して自らの作曲にモチーフを取り入れたかというエピソードや、黒人霊歌がクラシック音楽の一部門に受け入れられていく過程を説明している。

1926. Johnson, James Weldon, ed. Musical arrangements by J. Rosamond Johnson. *The Second Book of American Negro Spiritual*. New York: Viking P. 1925年出版の *The Book of American Negro Spiritual* と合本し、*The Books of American Negro Spirituals* として69年に再版されている。アフリカ音楽の影響を打ち出し、霊歌がアメリカ黒人の経験を語る歴史的記録であると明言している。

What is the secret of the wide variety of perennially fresh appeal of the Spirituals? How is it that an audience can listen to them for two hours without interlude and without boredom or satiety? The Negro took as his basic material just his native African rhythms and the King James version of the Bible and out of them created the Spirituals.... .. In Spirituals the Negro did express his religious hopes and fears, his faith and his doubts. In them he also expressed his theological and ethical views, and sounded his exhortations and warnings. ... Indeed, the Spirituals taken as a whole contain a record and a revelation of the deeper thoughts and experiences of the Negro in this country for a period beginning three hundred years ago and covering two and a half centuries. If you wish to know what they are you will find them written more plainly in these songs than in any pages of history. ("Preface")

霊歌が多様性に満ち、永遠に新鮮な魅力を持っている秘密は何なのだろうか。観客は、なぜ二時間も休むことなく聴き続け、飽きないのだろうか。黒人は、ふる里アフリカのリズムとキング・ジェームズ版の聖書を基にして霊歌を創造した・・・。・・・黒人は霊歌に宗教的な希望や恐怖、信仰や疑いを表現している。また、宗教的倫理的見方も表現し、勧告や警告も歌の中で発している。・・・霊歌の全体はまさに、300年前に始まったこの国で、250年間にわたり黒人たちが経験してきたことと、深く考えてきたことを記録し、明らかにしているのだ。黒人の経験や考えを知りたければ、どんな歴史書よりもこれらの歌の中にはっきりと書かれている。

1926. Odum, Howard W. and Guy B. Johnson. *Negro Workaday Songs*. Chapel Hill: U of North Carolina P. Rpt. New York: Negro Universities Press, 1969. 第14章の音楽分析を除いては、歌詞の提示と分析を中心とする。黒人霊歌のテキストは含んでいないが、黒人歌に対するこれまでの感傷的なアプローチをやめてこれを学問資料として扱おうという姿勢は、黒人（霊）歌研究の流れの中で、特徴的な一時代を記している。ただし、歌のテキストそのものがすでに感傷や主観を含んで記録されているのではないかという疑いはみられない。

Here are spontaneous products of the Negro's workaday experiences and conflicts. Here are reflections of his individual strivings and his group ways. Here are specimens of folk art and creative effort close to the soil. Here are new examples of the Negro's contributions to the American scene. Here is important material for the newer scientific interest which is taking the place of the old sentimental viewpoint. And here is a mine of descriptive and objective data to substitute of the emotional and subjective attitudes of the older days. ("Chapter I")

ここに示したのは、黒人の日常経験と葛藤から自然発生した産物である。個々人の闘いと黒人種という集団の双方が辿った道筋に関する考察である。土地に根ざした民俗芸術と創造的な営みの標本である。黒人がアメリカという舞台上でどんな貢献をしたかを、新たに例示しているのだ。ここにあるのは、新たな学問的興味の重要な研究素材で、これが従来の感傷的な視点に替わる。そしてこれが、いままで成されてきた感情的かつ主観的態度に替わる、描写的で客観的なデータの鉱脈である。

1927. Dett, R. Nathaniel, ed. *Religious Folk-Songs of the Negro as Sung at Hampton Institute*. Hampton, Va.: Hampton Institute P. (前項解説文参照)

1928. White, Newman I. *American Negro Folk-Songs*. Cambridge: Harvard UP. ホワイトがアラバマ科学技術専門学校（Alabama Polytechnic Institute）[1960年にオーバン大学（Auburn University）と改名]に奉職中、自身と学生とで収集した歌を収録している。大まかな分類は、宗教歌、社交歌、動物の歌、仕事歌、女性に関する歌、時事歌、犯罪の歌、人種を強く意識した歌、ブルースその他、となるがさらに細分して掲載してある。歌詞を中心とし、楽譜もある。参考文献表、インデックスなどを備えた研究書である。第一章の概説は、黒人歌（特に霊歌）の収集や普及と研究について優れた観察を示している。

Possibly it was the moderate success of these post-war publications that suggested the idea that the Negro might exploit his own songs to the advantage of the Negro race. At any rate the idea was broached in 1872 at Fisk University (Nashville, Tennessee)... All [Negro colleges] have found the device a most successful means of getting money and desirable publicity, and have continued its use to the present day. Although they used the spirituals mainly to obtain the interest of the white man, these colleges all made a practice of singing them at home, and no doubt contributed greatly to the preservation of the spiritual during the time when most of the literate and semi-literate member of the Negro race were desirous of forgetting it. ... Since the Negro colleges first put singers on the road, the Negro song has never been allowed to fall back

into obscurity. The song collections originally published from Negro colleges have gone through successive editions, generally with an increase in the number of songs included. ... [Later this period] Various collections and articles appeared from miscellaneous sources, most of them following the early post-war tradition of neglecting the secular songs and emphasizing the spirituals as a record of racial sufferings.

おそらく、南北戦争後の出版物 [ヒギンソンやアレンらによるもの] がそれなりの成功を収めたので、黒人は歌によって自らを益することができるようになるようになったのではなからうか。その考えは、1872年にフィスク大学(テネシー州、ナッシュヴィル)で表面化された。・・・すべての黒人大学は、収益と望ましい世評を得るのにその方法がもっとも有効だと知り、今日まで利用している。主に白人の興味を引くために霊歌が使われたとはいえ、これらの大学では歌唱の練習が行われ、霊歌の保存に大いに貢献したことは疑いない。その時期、黒人でいくらかでも文字を読める人々はたいてい、そうした歌は忘れたいと思っていたのだから。・・・黒人大学が最初の合唱団を旅に送り出したときから、黒人の歌が闇の中へ隠れてしまうことは二度となかった。数ある黒人大学が独自で出版した歌集は版を重ね、掲載される歌も大方は数を増していった。・・・[その後] さまざまなところから歌集や記事が出版された。それらのほとんどは、戦後初期のやり方を踏襲して、俗歌を無視し、霊歌を黒人の苦難の記録として強調している。

1930. Grissom, Mary Allen. *The Negro Sings A New Heaven*. Chapel Hill: U of North Carolina P. Rpt. New York: Dover, 1969. ケンタッキー州のルイズヴィルとアデア郡で新たに収集された歌を、楽譜とともに収録している。古い歌に新しい要素を加えながら、歌が継承されてきたと記されている。

1930. Johnson, Guy B. *Folk Culture on St. Helena Island, South Carolina*. Chapel Hill: U of North Carolina P. 白人の讚美歌や霊歌の黒人霊歌に対する影響を示している。セント・ヘレナ島のガラと呼ばれる方言(黒人英語)の報告分析と、同島のフォークロアについてもそれぞれ章が設けられている。ジョンソンは、アメリカ民謡「ジョン・ヘンリー」のパリエーションを集めた著作でも知られている。「白人から黒人へ」の影響方向理論は、1948年のジャクソンの著作でさらに詳しく推し進められることになる。

1931. Smythe, Augustine T., et. al. *The Carolina Low-Country*. New York: Macmillan. “The Negro Spiritual”のセクションを、ロバート・ウィンスロー・ゴードンが書いている。ゴードンは1928年から、アメリカ議会図書館のアメリカン・フォークソング資料室で初代室長を務めた。現在スミソニアン博物館の資料室に保管されているゴードン・コレクションには、およそ900本の録音シリンダーやディスク、1万を超える手書きの楽譜(聞き取った民謡を採譜したもの)などが収蔵されている。(資料には多種のフォークソングを含む。) *The Carolina Low-Country*に収められた歌は49曲で、歌詞には黒人の発音に近く表記する努力が伺える。

1933. McIlhenny, E. A., col. *Befo' De War Spirituals: Words and Melodies*. Boston: Christopher

Publishing House. 著者は、南北戦争前にはルイジアナに広大なサトウキビ農園を所有していた家族出身である。奴隷解放時に、所有地のほとんどが北軍に没収されていたにもかかわらず、数百の黒人が旧主人の保護を期待して、離散しないまま著者の家族の下に残っていたという。解放後の黒人に対する合衆国政府の無策によって、生活能力がないまま衣食住のすべてを失ってしまう黒人たちの悲惨を、奴隷制時代の牧歌的で幸福な描写と対照させて、批判している。収録された歌は、著者の周辺にいた多くの黒人から収集したものである。著者の視点から見た古きよき南部への郷愁がさせた仕事だとも言えるが、以下に引用するように、ジュピリー・シンガーズの成功以来人気になった黒人霊歌が、自分が聞いた黒人の歌といかにかけ離れているかを、批判的に示したかったと思われる。

These reconstructed spirituals ["spirituals" whose words and music faintly resemble the spirituals of old] have during the past ten or fifteen years become very popular, due first to their being broadcasted by phonograph records, and more lately through the air by radio, and second, because the white people of the stage have sung them through the length and breadth of the land, and due to their melody they have become very popular.

こうして作り直された霊歌（歌詞も音楽も昔の霊歌には似ても似つかぬもの）は、レコードの普及や最近のラジオ放送によって、この10年か15年の間にとっても人気になった。また白人の歌手が長期間、各地の舞台上で霊歌を歌い、そのメロディーが人気を呼んだのだ。

1940. Work, John W. *Negro Songs and Spirituals: A Comprehensive Collection of 230 Folk Songs, Religious and Secular, with a Foreword by John W. Work*. New York: Crown. フィスク大学の教授であったワークによる歌集。彼が歌を収集したわけではないが、各曲の出典は明らかにされていない。ここでワークは、黒人霊歌が白人霊歌の「真似」(imitation)であるかどうかという議論に対して、真似ではなく改作(re-assembling)であるといつて、黒人の創造性を強調している。

1942. Parish, Lydia. *Slave Songs of the Georgia Sea Islands*. Athens: U of Georgia P. パリッシュが25年間にわたって収集した歌を、種別して解説付きで載せてある。60曲のうちシャウトと宗教歌は合わせて32曲ある。ジョージアに残存するアフリカの歌を含めるなど、資料として価値が高い。解説の文体は親しみやすく、学問的な突き放しの口調がない。そのために、著者が歌い手たちの人格までも知ったうえで、歌を記録してきたことが伝わってくる。歌い手の写真もあり、歌が環境や風土と一体で、歌い手の人格や生活から切り離せないのだという、パリッシュの思想が表現された本である。

1948. Jackson, George Pullen. *White and Negro Spirituals, Their Life Span and Kinship: Tracing 200 Years of Untrammelled Song Making and Singing Among Our Country Folk With 116 Songs as Sung by Both Races*. Locust Valley, NY: Austin. 「白人が歌ったアメリカ宗教歌のすべて」と題した1部と、「黒人が歌ったアメリカ宗教歌のすべて」と題した2部で構成され、6つの研

究付録がついている。ジャクソンは「聖なるハーブ」(Sacred Harp)と呼ばれる南部白人霊歌を世に知らしめた人で、この本では白人と黒人の宗教歌のつながりを、歌詞テキストと音楽を比較対照して考証している。ジャクソンが提起した問題の一部は以下の通り。

Are the white spirituals and the negro spirituals essentially the same body of song, differing merely with the different character of the singers? If they are one body of song did that body come into being among the whites and go over to the blacks, or was it the other way around? ... If the American negroes made them, what song materials or song characteristics stem from their remote African racial background? What from their American environment? If the white people made them, what remote white-racial earmarks show such origins? If the origin and direction of development was white to negro, why have we had to wait so long for the correction of the general notion that it was the other way around? ("Introduction")

白人霊歌と黒人霊歌は、歌手の特色が違うだけで中身は基本的に同じなのだろうか。本体が同じ歌であるなら、まず白人で始まって、それから黒人のところへ行ったのだろうか。それとも反対方向だったのだろうか。・・・もしアメリカの黒人が霊歌を作ったのなら、遠いアフリカの人種的背景から来ている要素や特色はどんなものか。アメリカの環境による影響はどうか。もし白人が作ったのなら、昔からある白人種のどんな特徴がそうした起源を記したのか。もし起源が白人で白人から黒人へという方向を取ったのなら、黒人から白人へという方向を信じた誤った考えを、なぜこんなに長い間訂正せずに来てしまったのだろうか。

1953. Fisher, Miles Mark. *Negro Slave Songs in the United States*. New York: Carol Publishing Group, 1990. 黒人霊歌は奴隷の歴史を語るものだという観点を持ち、1740年から1867年までを、歌のテキストを挟み込みながら解説する。著者は、「奴隷歌発展の形跡を要約」と述べている。

1963. Courlander, Harold. *Negro Folk Music, U.S.A.* New York: Columbia UP. 文化人類学者による歌の紹介と分析。著者は、黒人の歌を「大規模で重要な口承文芸」ととらえ、西インド諸島の歌やルイジアナのクレオール・ソングなどに言及しつつ文化的継続性を示そうとしている。

1981. *Songs of Zion*. Nashville: Abingdon Press. 黒人キリスト教会の伝統に従って作成された、超宗派聖歌集。収録されている歌は讃美歌(Hymns)、黒人霊歌(Negro Spirituals)、黒人ゴスペル歌(Black Gospel)、祭礼歌(Songs for Special Occasions)、礼拝用音楽(Service Music)に分けられている。讃美歌、黒人霊歌、ゴスペル歌については歴史的解説もある。編曲は1930年代のものがほとんどで、J. Jefferson Clevelandが1937年に多くを手がけている。

2001. Batastini, Robert J., ed. *African American Heritage Hymnal: 575 Hymns, Spirituals, and Gospel Songs*. Chicago: GIA. プロテスタント系黒人教会用の聖歌集。歌の底本として、Johnson and Johnson, *The Books of American Negro Spirituals*と Fisher, *Negro Slave Songs in the United*

Statesを用いている。

黒人霊歌関連の主な参考文献（著者のアルファベット順，あいうえお順）

- Abbington, James, comp. and ed. *Readings in African American Church Music and Worship*. Chicago: GIA, 2001.
- Bolton, Dorothy G., col. Music arr. Harry T. Burleigh. *Old Songs Hymnal: Words and Melodies from the State of Georgia*. New York: Century, 1929. ジョージア州で収集した民間宗教歌をわかりやすい楽譜とともに示し，讃美歌集として仕上げたもの。黒人霊歌と思われるものも白人霊歌と思われるものも混在している。歌の収集履歴は示されていない。発音にも特に配慮はなく，ほぼ標準の綴りになって印刷されている。
- Botkin, B. A. *Lay My Burden Down: A Folk History of Slavery*, foreword by Jerrold Hirsch. 1945. Athens: U of Georgia P, 1989.
- Burlin, Natalie Curtis. "Negro Music at Birth." *The Musical Quarterly* 5 (Oct. 1919). 黒人教会で歌の歌われる様子を報告している。
- Cable, George Washington. "Creole Slave Songs." *The Century Magazine* (XXXI, April 1886) 807-28.
- The Cleveland Public Library. Foreword by Samuel A. Floyd, Jr. *Index to Negro Spirituals* (CBMR Monographs, No. 3). Rev. ed. Chicago: Center for Black Music Research, Columbia College Chicago, 1991.
- Cooper, Michael L. *Slave Spirituals and the Jubilee Singers*. New York: Clarion, 2001. 写真付きで簡単な黒人霊歌入門書。後半はフィスク・ジュビリー・シンガーズの説明になっている。巻末に代表的な歌を楽譜で7曲載せている。
- Courlander, Harold. *Negro Folk Music, U.S.A.* 1963. New York: Columbia UP, 1966.
. *Treasury of Afro-American Folklore*. 1976. New York: Marlowe, 1996.
- Cox, John Harrington. *Folk Songs Mainly from West Virginia*. New York: Da Capo, 1977.
- Davenport, Linda Gilbert. *Divine Song on the Northeast Frontier: Main's Sacred Tunebooks, 1800-1830*. Lanham, Md.: The Scarecrow, 1996.
- Davis Jr., Arthur Kyle, ed. *More Traditional Ballads of Virginia*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1960.
, ed. *Traditional Ballads of Virginia*. 1929. Charlottesville: UP of Virginia, 1969.
- Dixon, Christa K. *Negro Spirituals from Bible to Folksong*. Philadelphia: Fortress, 1976.
- Du Bois, W. E. B. *The Souls of Black Folk*. 1903. New York: Bantam, 1989.
- Epstein, Dena J. *Sinful Tunes and Spirituals: Black Folk Music to the Civil War*. Urbana: U of Illinois P, 1977.
黒人霊歌の初期収集者について，史料を基に詳しく書かれている。
- Herder, Nicole Beaulieu, Ronald Herder. *Best-Loved Negro Spirituals: Complete Lyrics to 178 Songs of Faith*. Mineola, NY: Dover, 2001.
- Hill, Patricia Liggins, general editor. *Call and Response: The Riverside Anthology of the African American Literary Tradition*. Boston: Houghton Mifflin, 1998.
- Horn, Dorothy D. *Sing to Me of Heaven: A Study of Folk and Early American Materials in Three Old Harp Books*. Gainesville: U of Florida P, 1970.
- Hughes, Langston, and Arna Bontemps. *The Book of Negro Folklore*. New York: Dodd, Mead & Co., 1958. 6章に黒人霊歌が載っている。
- Jackson, Bruce, ed. *The Negro and His Folklore in Nineteenth-Century periodicals*. Austin: U of Texas P (The American Folklore Society), 1967.
, col. and ed. *Wake Up Dead Man: Afro-American Worksongs from Texas Prisons*. Cambridge, Mass.:

- Harvard UP, 1972. テキサス刑務所で収集された黒人の仕事歌集。すべての曲に楽譜がつき、バリエーションも示されている。
- Jackson, George Pullen, coll. and ed. *Spiritual Folk-Songs of Early America: Two Hundred and Fifty Tunes and Texts With an Introduction and Notes*. 1937. Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1975. 南部の白人民間宗教歌を収集した重要な資料。宗教的な物語歌、讃美歌、霊歌を含む。
- . *White and Negro Spirituals: Their Life Span and Kinship*. Locust Valley, NY: Augustine, ND. (Acknowledgements written in 1943.)
- Joyner, Charles. *Shared Traditions: Southern History and Folk Culture*. Urbana: U of Illinois P, 1999.
- Katz, Bernard. *The Social Implications of Early Negro Music in the United States*. New York: Arno Press and the New York Times, 1969.
- Levine, Lawrence W. *Black Culture and Black Consciousness: Afro-American Folk Thought from Slavery to Freedom*. Oxford: Oxford UP, 1977.
- Lincoln, C. Eric and Lawrence H. Mamiya. *The Black Church in the African American Experience*. 1990. Durham: Duke UP, 2001.
- Lomax, John A. and Alan Lomax. *American Ballads and Folk Songs*. 1934. New York: Dover, 1994.
- Lovell, John. *Black Song, the Forge and the Frame: The Story of How the African-American Spiritual Was Hammered Out*. New York: Paragon, 1972.
- Marini, Stephen A. *Sacred Song in America: Religion, Music, and Public Culture*. Urbana: U of Illinois P, 2003.
- Odum, Howard W. and Guy B. Johnson. *The Negro and His Songs: A Study of Typical Negro Songs in the South*. 1925. Westport, Conn.: Negro Universities P, 1972.
- Reagon, Bernice Johnson. *If You Don't Go, Don't Hinder Me: The African American Sacred Song Tradition*. Lincoln: U of Nebraska P, 2001.
- Raboteau, Albert J. *Slave Religion: The Invisible Institution in the Antebellum South*. 1978. New York: Oxford UP, 1980.
- Sanders, Lynn Moss. *Howard W. Odum's Folklore Odyssey: Transformation to Tolerance through African American Folk Studies*. Athens: U of Georgia P, 2003. 南部社会民俗学者の草分け、ハワード・オダムに関する研究書。
- Shaw, Arnold. *Black Popular Music in America: From the Spirituals, Minstrels, and Ragtime to Soul, Disco, and Hip-Hop*. New York: Schirmer, 1986.
- Southern, Eileen. *The Music of Black Americans: A History*. 1971. New York: Norton, 1997. 黒人音楽の歴史をアフリカ音楽から説き起こして現代まで概説してある。
- Spencer, Jon Michael. *Protest & Praise: Sacred Music of Black Religion*. Minneapolis: Fortress P, 1990.
- Talley, Thomas Washington. Charles K. Wolfe, ed. *Thomas W. Talley's Negro Folk Rhymes*. Rev. ed. of: *Negro Folk Rhymes, Wise and Otherwise* (New York: Macmillan, 1922). Knoxville: U of Tennessee P, 1990.
- Thurman, Howard. *Deep River and The Negro Spiritual Speaks of Life and Death*. Richmond: Friends United P, 1975.
- Towne, Laura M.. Rupert Sargent Holland, ed. *Letters and Diary of Lau M. Towne: Written from the Sea Islands of South Carolina, 1862-1884*. 1912. New York: Negro Universities P, 1969. シャウトについての観察も書かれている。
- Ward, Andrew. *Dark Midnight When I Rise*. New York: Farrar, 2000. フィスク・ジュピリー・シンガーズの詳しい評伝。
- Warren, Gwendolin Sims. *Ev'ry Time I Feel The Spirit: 101 Best-Loved Psalms, Gospel Hymns, and Spiritual Songs of the African-American Church*. New York: Henry Holt, 1997. アフリカ系アメリカ人のキリスト教会で歌われる 101 曲を掲載。各歌にキリスト教徒の立場からの解説がつけてある。

歌はどこから（ウェルズ）

北村崇郎『ニグロ・スピリチュアル：黒人音楽のみなもと』みすず書房，2000年。黒人霊歌の歴史と背景の説明を中心とする。テキストの分析はないが，本文中で歌の紹介がされ巻末に歌詞と翻訳，解説を含む。

コーン，ジェームズ H. 『黒人霊歌ブルース：アメリカ黒人の信仰と神学』梶原寿訳，新教出版者，1983年。

デュボイス，W. E. B. 『黒人のたましい』木島始，鮫島重俊，黄寅秀訳，岩波文庫，1992年。

風呂本惇子『アメリカ黒人文学とフォークロア』山口書店，1986年。第一章で黒人霊歌を扱っている。